

第二十九回大原富枝賞

総評〔一般の部〕

高知文学学校運営委員 杉本 雅史

名作と言われる作品は多くあるが、関わっている「高知文学学校」で好きな小説のアンケートをとって見た。そこに数十作品が書かれていたが、同じ作品が一つもないのに驚かされた。

作品に対する好みや評価は異なるのが当たり前かもしれないが、こと賞の選考となると嫌でも優劣を決めないといけない。毎年申し訳ないと思いつながら選んでいるが、今年は特に困った。もう一人の選考委員、若江氏と推す作品が全く異なっていたからだ。最終選考に残った随筆、小説の各十編には殆ど共通の傾向はみられず、内容も文体も異なり、それぞれが独自の世界を持っており、好みで選んではいけないと戒めても、少なからず影響を受ける。妥協は許されないので選考の時間は伸びて、疲れ果てた。

最優秀賞を最後まで争ったのは「Forty-nine」と「小瓶」である。文体も内容も全く異なる作品である。年齢も住む場所も違うので作品世界が違うのは当然だが、穏やかな文体の中の静かな時間への共感から「小瓶」が選ばれた。随筆で優秀賞となったのは「親父」である。認知症というテーマは今日身近な課題であるが、「親父」の文章は平易であるが迫ってくる力はすごい。重すぎる課題を抱えたまま救いも無いようにみえるが、どこかで親と子が繋がっているような最後の表現は秀逸だった。

今年の応募作品は小説三十、随筆二十六作品であった。質の高い作品を読みながら大原文学賞が高知の文学土壤に確かに根付いていると実感した。

（審査員―杉本雅史、若江克己）